

移動する彫刻の視点、通路の彫刻

Arai Ken



《無題》2024年 樟 H93xW42xD32cm

Asaka Kotaro



《鳥賊乳児》2025年 砂岩 H57xW43xD68cm

Ueta Taisei



《signboard holder かぐや姫の月まで》2024年 写真 サイズ可変

本展は、この場所（銀座）この空間（ガラスケース）から新たな彫刻の可能性を考える「実験」です。メトロ銀座ギャラリーの空間を念頭に、彫刻学科研究室がテーマを設定。個性豊かな表現者たちが、学生の中から出品作家を推薦する形で応答しました。多彩なアプローチから選ばれた作家たちは、この実験場で何を試みるでしょう。ここからはじまる、表現のかたちにご注目ください。

2025年7月24日(木) — 10月14日(火)

メトロ銀座ギャラリー

東京メトロ 日比谷線 銀座駅コンコース
B7・B8 出入口付近

主催：公益財団法人 メトロ文化財団 企画監修：武蔵野美術大学彫刻学科研究室

植田大誠



《signboard holder かぐや姫の月まで》2024年 写真 サイズ可変

略歴 | 2003年香川県生まれ。

作家コメント | 単発派遣先で出会った大学生と定年を過ぎたおじさんの時給が同額だった。工場でのライン作業を機械で行うよりも人間で行う方が安上がりだと言われた。一日中バセリの見栄えが悪い箇所をちぎるアルバイトをした。知人が土地の一部を他国籍の人間に売った。祖父が畑をやめた土地が山に飲み込まれた。8時間バセリをちぎっても500gに満たなかった。気がつくと事実はいつも目の前にあった。私は日常のジャーナリストでもあり、作家でもありたい。

推薦… タムラサトル

植田は、道路で看板を持ち、来客を不動産物件に誘導するというアルバイトをしていたことがある。ある日、予約の来客は1人、しかも8時間待っていたが来なかったということもあったようだ。そのために、看板を1日中持ち続ける不条理。しかし、彼はそのバイトで生活費や制作費を稼いでいる。いったい何をしているんだとジレンマに陥る。大きな矛盾や道理に合わないことに出会った時、それに立ち向かおうとする。これが本作の原点だろう。

作品化するにあたり、その側（フォーマット）を踏襲し、看板の内容・場所・登場人物を変えた。この何かおかしいという感覚を、どのようにアウトプットしたらよいのだろうか。看板の内容(字面)なのか、それを持つ人物なのか、その場所なのか、なにが重要なのだろう。今までの作品を見た印象では、側（フォーマット）は面白いのだが、その明確な方法を見出せていない気がする。

メトロ銀座ギャラリーは、地下鉄の通路にある展示空間だ。この場所にどう挑むのか、よくよく考えてほしい。展示のためではない空間・雑踏にあえて向き合うことで、もしかしたら答えが見つかるかもしれない。

この空間は、多忙な人々・多様な目的の人々・様々な世代の人々が、通り抜ける場所にある。「広場の彫刻」ではない、「通路の彫刻」は可能だろうか。



荒井健



《遠く》2023年 樟 H185xW71xD72cm

略歴 | 2001年神奈川県生まれ。

展覧会：2024年「2023年度武蔵野美術大学卒業・修了制作展」武蔵野美術大学（東京）。「2023年度第47回 東京五美術大学連合卒業・修了制作展」国立新美術館（東京）。

作家コメント | 鏡も行き交う人波も見つめるほど不可解に揺らぎ、懐疑の波に吞まれる。自己も世界も曖昧に溶け、輪郭は霞み、境界は滲む。今はただ眼を瞑り、心を楽土へ委ね静かに天啓を待ち望む。安寧の淵で、沈黙を裂く転機を期待したい。

推薦… 伊藤一洋

彼は静かにそこにいる。カフエオレ色の木肌をまとい、視線を投げだすその先に何を見るのか。荒井健が彫ったものに会うとき、私は魂の透明を想う。清澄なる存在を感じる。精神が蒸留されうことを知る。私は彼に尋ねる。あなたの彫刻はどこから来たのですか？彼は私とは目を合わせずに、照れるように、困ったように、静かに小さな笑みを浮かべ答える「……………」きっとそれは正しい答えではない。彼もまだ答えを知らないのだ。いや彼自身が答えを知りたいのかさえ定かではない。だからこそ彼は槌を振るい、鑿を楯に差し込む。香りが爆ぜる。薄水をつまみ上げる慎重さで塊を削ぎながらその奥へと向かう。木の中心に自らの中心を重ね見て、小さな希望を抱いてすり足で進む。近づいたかと思えばまた彼方へ遠のく。木の量は減じ、鑿痕の残るその胸には世界が滲む。そしてついに整えられた隙に自分が映る。あらためて問う。彫刻とはどこから来るものか？人類史上多くの彫刻家が掲げた問い。いまだ誰も見つけられないその土地へ彼も旅立つ。雨が降る。太陽が朱い。鳥がゆき、季節が過ぎる。

今そこに影を与えられ佇む一本は、荒井健であり確実に彫刻である。そんな真実をひとつ。

浅賀光太郎



《蔓鳥賊》2024年 安山岩 H53×W46×D48cm

略歴 | 2002年新潟県生まれ。

展覧会：2025年「2024年度武蔵野美術大学卒業・修了制作展」武蔵野美術大学（東京）。「2024年度第48回 東京五美術大学連合卒業・修了制作展」国立新美術館（東京）。

作家コメント | 私は幼少期に海に遊びに行くことが多く、海の生き物に接触する機会が多かった。中でもタコとイカの柔軟な体と、自由に腕を動かす姿は独特の魅力を持っており強く心を掴まれた。また、石という材は固く基本的に変化することがない。私は惹かれた存在の動きを切り取り、石で形にする事で不変の存在として残そうとしている。

推薦… 大野綾子

作品をつくる上で、「石を見る」という事と、「石を彫る」という事は、全く異なる働きかけであると思っている。

いまこの瞬間も、地球のマントル近くでは大地が絶えず変容している。遥かな海底の地層もまた、堆積とともに熱や圧力にさらされ、常に変質しつつある。しかし、作品にしようとする目の前に置いた石は、どう考えても「動く」という要素はない。

「石を見る」事は、作者の本質性によってそのものが様々な何か、へと変容、発展（豊かに）していく可能性を持っている。一方で「石を彫る」事とは、作者が実際に手で触れ、削りながら、目の前にある「それ」と、「自分自身」との本質に迫っていく事になる。こちらのやりとりには、それはそれは、行ったり来たりと時間がかかるのだ。

浅賀くんは今、石を彫っている。彼は、時にアトリエの階段を2、3段飛ばして駆け上がるような、軽快で機敏な動きをする人だ。その身体的なテンポや気質のようなものが、彼のつくる作品にも関係しているように思う。

彼の石の作品を見る。そもそも石は今も、深い地中では動き続けていて、変容し、進化しているのだろう。そんな事を想像する事ができるのは、「石を彫りたい」と願う正直さからくる原動力と、熱意が支えているからと感じる。そしていま、彼は「石を彫る」ことで、これまで見えていた世界の輪郭を、少しずつ変えていくような、新たな面白さに気づき始めているようだ。

私はどこだって、いつだって、「石を見る」という事について深く深く、そして明快に見るだけなのです。